

し ろ と り た て い せ き

白鳥館遺跡

—中世の北上川の川湊—



北からみた白鳥館遺跡

白鳥館遺跡は、奥州市前沢字白鳥館に所在します。遺跡は、北上川に半島状に突き出した丘陵から西側の低地にかけて広がります。北上川は遺跡を取り巻くように西から南へと流れています。

ここは、12世紀、平泉が栄えていた頃の川湊の跡と考えられる遺跡で、北上川なくしては成立しえなかった都市「平泉」の一面を物語る貴重な遺跡です。

白鳥館の変遷

生産と流通 平安時代末～中世 12世紀

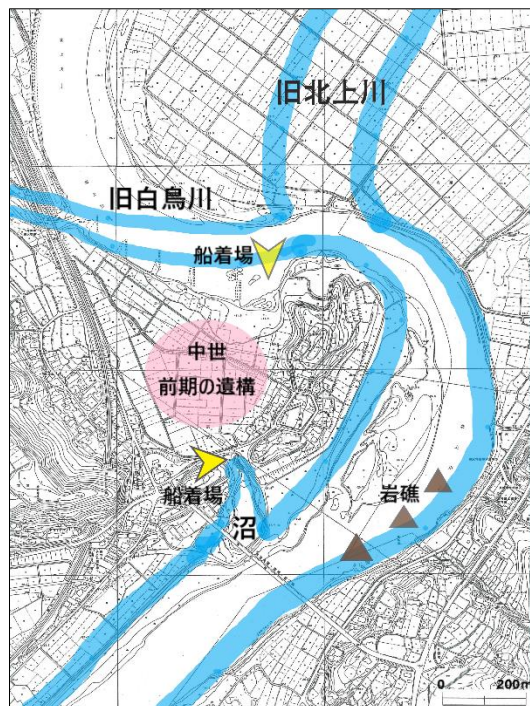
■川湊の開設

白鳥館遺跡が本格的に使われ始めたのは、12世紀、奥州藤原氏初代清衡により平泉の建設が始まって少し経った頃で、遺跡西側の低地に建物が建てられ始めます。建物は12世紀を通じて頻繁に建て替えられており、連続して利用されていたことが窺えます。

白鳥館は北と南に船着き場の適地を擁していたことに加え、対岸との渡河点でもあったことから、平泉の北の川湊として使われたとみられます。やがて平泉に毛越寺が完成する頃には、「かわらけ(素焼きの酒杯)」の生産や鉄の精錬、銅や石の加工などの手工業生産の機能が加わっていきます。現代でいうなら、さしずめ流通工業団地といったところでしょうか。



▲ 白鳥館遺跡 8次調査掘立柱建物跡



▲ 鉄塊・鉄滓

右2点は熔解した鉄の塊を切断したもの、左は鉄を溶かしたときに生じた滓を切断したものです。外見では見分けがつかませんが、断面をみると、鉄塊は内部には鉄が残っており、鉄滓は内部に鉄分が残っていないことがわかります。

◀ 12世紀の流路復元図

12世紀の北上川は、今のように西に大きく蛇行しておらず、白鳥館遺跡に向かってほぼまっすぐ流れ、遺跡の北端で白鳥川と合流していたと推定されます。遺跡の南には、北上川によって形成された沼があり、どちらも船の停泊には好条件の場所でした。これに加え、遺跡の東の川底の岩礁による難破を避けるため、荷を揚げ下ろしすることもできました。



◀ かわらけ窯跡

かわらけを焼いた窯跡。長さ約2m。遺跡の南、沼付近では粘土を採掘した穴も見つかっています。生産されたかわらけは平泉に供給されました。



◀ かわらけ窯跡出土かわらけ

左上の1点はロクロかわらけで、窯跡が廃絶する時に埋納されたと考えられるものです。それ以外は、手づくねかわらけで、かわらけ窯が埋まる過程で廃棄されたものです。ロクロかわらけ直径8cm。



◀ 水晶製数珠玉

直径2cmの水晶製の数珠玉。T字の穴から母珠とわかります。横の穴は平滑に磨かれているのに対し、縦の穴にはらせん状の痕が残っていることから、横穴を磨いている途中で割れた未成品と推定できます。



◀ 銅塊

長さ2.9cmの熔解した銅。当時、銅は貴重品であるため再利用されることが多く、このような出土例はとても珍しいです。

流通の拠点 中世 13～14世紀

■新たな有力者のもと

文治5年(1189)、源頼朝によって奥州藤原氏は滅亡、鎌倉御家人による支配が始まります。平泉の政庁であった柳之御所遺跡は焼失したあと再建されませんでした。白鳥館は変わることなく湊や生産地として機能し続けます。鎌倉時代の始めは、12世紀と同じ場所に拠点を置きますが、鎌倉時代の後半には、拠点が川縁へと移動します。ここからは、威信を示すものとして鎌倉御家人に好まれた中国産の盤が出土していることから、鎌倉時代になっても白鳥館には有力者が関与し経営がなされていたことが窺えます。



◀ 磁電窯産盤

中国南部で焼かれた直径20cm以上の盤(大皿)。鎌倉では多く出土しますが、東北地方ではあまり例がありません。



▲ 白鳥館遺跡 12次調査区

両側に側溝を持つ道路跡。路面幅は1.4～2.6m。写真奥の林の先は、まもなく北上川です。



◀ 製鉄炉の炉壁

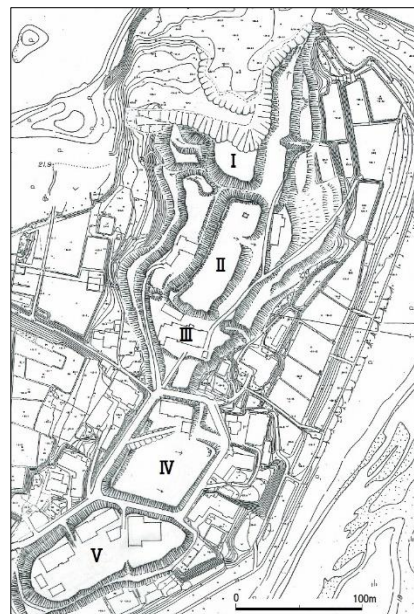
砂鉄から鉄を作るための直径1m以上にもなる製鉄炉の炉壁。製鉄地から持ち込まれたと考えられます。幅24.5cm。

城館 中世 15 世紀

■中世の城として

14 世紀の終わり、室町時代を迎える頃には、白鳥館の丘陵に中世城館が築かれます。その一方で低地に広がっていた遺構は減少し、丘陵の麓以外には見られなくなっていきます。これは、白鳥館の低地の遺構群が、丘陵部へと移転したためと考えられ、流通拠点の機能を維持したまま、丘陵へ本拠地を移して中世城館を築いたとみられます。

城館は、14 世紀終わり頃に築かれた後、15 世紀に現在のような姿に改修されています。15 世紀の改修では、丘陵を大きく造成して階段状の地形を作り出しているため、城館初期の姿はあまりよくわかっていません。



◀ 花の絵が描かれたかわらけ

伝二の丸地区入口の堀跡から見つかったかわらけの大皿。表裏に同じ花の絵が描かれています。赤で 6 弁の花弁、白で花房、黒で茎が表現されていますが、何の花を描いたかは不明です。彩色された絵が描かれたかわらけは、全国でも非常に珍しいものです。直径 12.8 cm。14 世紀末～15 世紀前半。



▲ 白鳥館遺跡縄張図（室野秀文氏作図）

I が本丸、II が二の丸、III が三の丸と呼ばれるところです。I は北側 2/3 が失われています。現在 II にある白山神社は、昭和 30 年代まで本丸の北端にありました。

北上川の要衝

■流路の変遷

現在の北上川は白鳥館周辺で大きく蛇行し、流れも急になっています。西岸には胆沢扇状地の上野原段丘、東岸には北上山地のブナ峠火山岩がせまっており、川幅が狭められています。

現在、白鳥館の北西で北上川は大きく蛇行していますが、元禄 12 年(1699)の地図では、白鳥館の東を直流するように描かれています。天保 11 年(1840)に前沢村と赤生津村境に新しい川を掘削し、河道の切り替えを実施したものの、13 年後の嘉永 6 年(1853)には施工の不備と洪水で蛇行した河道に戻ったといえます。

このことから、北上川は天保 11 年(1840)よりも前、おおむね 18 世紀前半に、洪水などによって自然に蛇行して現在に近い形に固定していたと考えられます。



▲ 下胆沢大絵図（部分）

元禄 12 年(1699)

この時点では、白鳥館周辺での川の蛇行がありません。

川と生きる

■洪水の歴史

北上川は、周辺の地域に頻繁に水害を引き起こしてきました。昭和 22 年、23 年(1947, 1948)のカスリン、アイオン台風では、白鳥館の集落も低地の家は軒まで水に浸かるなどの被害がありました。鶉ノ木地区との間をつなぐ道路が浸水して白鳥館が島状に孤立し、3～4 日間、白鳥館から外に出られなかったといえます。幸い、長年の川との付き合いの経験から、住民は高台の家に身を寄せ、死者は出ませんでした。



▲ 白鳥館の川岸に係留された長部型の川舟